

《京都》御所と離宮の栞(おり)



其の二十一

京都御所では、平成31年3月12日(火)～21日(木・祝)の期間に、天皇陛下の御即位30年を記念して、「御即位30年記念京都御所特別公開」を行います。特別公開に合わせて、本号は展示に関連した内容としています。

けんじょうのしょうじ 賢聖障子



狩野典信・住吉広行・住吉弘貫筆 岡本保考書 案本武雄模写 九面 絹本着色 縦244.5×横261cm

京都御所において最も格式の高い正殿である紫宸殿ししんでんには、賢聖障子が立てられています(栞其の十四)。賢聖障子は、天子を支える名臣の図で、母屋と北廂もや きたびしの間に立てられ、中央に天子を象徴する霊獣である獅子・狛犬ぶんきと負文亀(神亀文を負って出現した瑞祥を表すという亀)が、その左右東西に中国の殷から唐時代にかけての賢人りょしょう たいこうぼう、呂尚(太公望)や諸葛亮しょかつりょうなど併せて32人が画かれています。人物の上部には色紙があり、各賢人の功績が書かれています。中国では古くから儒教思想により、徳の高い君主の元には功臣が集い、君主もまたそれを重んずべきことを説き、功臣を壁画に画きました。日本においても、平安時代から画かれてきた伝統的な絵画です。

寛政2年(1790)の造営時は、狩野典信かのうみちのぶが下絵を画きましたが、絵の完成を見る前に没したため、さらなる考証を加えて後任の住吉広行すみよしひろゆきによって引き継がれました。これらの大部分は嘉永7年(1854)の大火による焼失を免れ、安政2年(1855)の造営では広行の息子である住吉弘貫すみよしひろつらが一部を修理、獅子・狛犬と負文亀の一面を新たに製作して使用されました。色紙の文字は、承明門と紫宸殿の扁額を書いた書博士岡本保考おかもとやすたか(栞其の二十)が担当しています。現在紫宸殿には、障壁画原本保護のため、昭和41年から45年にかけて画家の案本武雄まつもとたけおが模写したものが立てられています。

本年行われる即位礼正殿の儀に際し、紫宸殿に置かれていた高御座と御帳台が東京・皇居に移動されており、紫宸殿内部が見渡せるこの機会に是非御覧ください。



母屋より賢聖障子を望む



獅子・狛犬・負文亀